



旧金田町の再建期間中に財政課長だった前収入役の田中純生さん（金田）「政治生命をかけた当時の町長の影響は大きかった。『鉛筆1本、紙一枚もムダにする』という節約精神が職員に浸透しました」

旧金田町の再建当初に財政担当だった渡邊巧さん（神崎）、東京で自治省との協議中に娘が誕生した。「目の前のことをただひたすらにやった。意識を高め、必死になれば再建できるということを学びました」



旧方城町の再建期間中に財政課長だった松尾英俊さん（井城）「国・県と町との間に立つ担当部署、チームの和があったからこそ乗り越えられた。小さな力も束ねれば大きな力になることを感じました」

旧方城町の再建期間中に担当係長だった田丸孝司財政課長（伊方）「赤字の解消は再建の目標であって、ゴールではない。脱却後は緩みが生じます。改善した財政構造の定着こそが、真の到達点だと思う」



旧赤池町の再建期間中に担当係長だった山本正則赤池支所長（市場）「再建がもたらしたのは職員の意識改革、自らが今何をすべきかという自己改革でした。計画行政の必要性を身をもって実感しました」

旧赤池町の再建期間中に財政課長だった安武憲明さん（上野）夕張市など各地で講演「再建の原則は『入を計って出を制する』こと。計画を着実に実行するため、常に緊張感と強い意志が必要でした」

あの意識は風化したか

往事を語る

かつて旧3町が果たした財政再建は行政と住民の意識改革をもたらしました。しかし時を経た今、残念ながら両者の危機感の共有は風化しつつあります。往事を語る肉声から「あの日の経験」を思い起こしてみましよう。

自 分たちの力で進める自主再建と国の管理下で行う再建との大きな違い。それは精神的な部分、つまり意識の差が第一に挙げられます。この意識改革こそが財政再建の要点です。自主再建での「少しの甘え」と再建団体での「大きな危機感」。その違いは、時代背景や取り組み方によって差

はありますが、行政の決意として住民にも確実に伝わりました。実際に旧赤池町では「行政ができないからやらない」ではなく「できることからやろう」と、不足する行政サービスを補うように、住民による多くのボランティア団体が自発的に組織されています。町を支える住民パワーが計画より早

↓旧赤池町の再建中から現在も継続する「ひこさんがお夢の会」のこのほり掲揚。



い再建団体脱却の原動力でした。自主再建でも計画を立てて財政状況の改善を図るわけですから、順調に行けば財政を立て直すことはできます。それが、ことごとく失敗に終わったのは、簡単に言えば行政が計画どおりに進められなかったからです。民間企業ならとくに破綻しているのに、自治体

財政の資金繰りは制度上保証されます。そこに一般的に言われる「制度が許す危機感の欠如」が生じるのです。では、旧3町の当時の危機意識や培ったコスト感覚は風化してしまっただけでしょうか。答えは「風化したというが、完全には風化していない」です。

往事の暗いムードや閉そく感、厳しい経験の記憶はまだ残っています。しかし、合併というレールに乗る根拠のない安心感から、当時の意識は風前のともしびです。多額の借金を抱える福智町では、旧3町の経験と教訓を生かしたまちづくりと、危機感共有の再燃が求められています。



↑再建中、クリスマス時期に町を照らした「赤池町を明るくする会」による新生の灯。



旧金田町の再建期間中、町外の会社に勤務していた松田清子さん（金田）「予想よりも生活への影響は少なかった。詳しい財政状況を知る機会がなかったため、一住民としては何もできませんでした」

旧金田町の再建を振り返る行政相談員の田中和敏さん（神崎）「当時は手配料が上がったという記憶しかない。再建は行政の計画性と経営感覚の欠如が招いたもの。もっとしっかりと欲しいと感じました」



旧方城町の再建期間中、方城町商工会の指導員だった松村幸夫事務局長（伊方）「商工業界にもあきらめムードが漂いました。町からの補助金が減るなか、経費を節減し、経営感覚は磨かれたと思います」

旧方城町の再建時に子育て中だった仲島貴久美さん（伊方）「保育料の値上げが直接生活に響きました。自分たちの町が国に管理されているという拘束感もあり、一日も早く再建から脱却して欲しかったです」



赤池町商工会青年部の秋元克之さん（赤池）「当初は、ついに赤池にも来るべきものが来たという感じ。度重なる報道を見て事の重大さを実感しました。職員の節約ぶりに影響され、危機意識を持ちました」

旧赤池町の再建時から数々のボランティア活動に参加する平野アキ子さん（市場）「批判しても前進しない。前向きに受け止めました。自分にできることはないか。気づき・考え・実行する意識に変わりました」